

研究資料

新出「いろはたとへどどいつ（仮題）」の翻刻と解題

吉海直人

同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
教授

Bibliographical Introduction to the
“IROHADODOITSU” in My Possession

Naoto Yoshikai

Department of Japanese Language and Literature,
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

要 旨

「いろはかるた」の研究に有益と思われる新出資料として、「いろはたとへどどいつ」（仮題）を紹介したい。これは先に報告した「たとゑづくしいろは歌當和訓」に類するもので、「いろはどどいつ」の冒頭部分にことわざが巧妙に詠みこまれているものである。こういった資料に関しては従来報告されていないようなので、ここに図版を付して紹介することで、今後の研究の参考にしていただきたい。

【キーワード】いろはたとへ・いろはどどいつ・いろは短歌

一、「いろはたとへどどいつ（仮題）」について

奇妙な本を入手した。残念なことに表紙が欠落しているので、正式な書名はわからない。内容はいろは分けになったどどいつの本である。惜しいことに落丁があり、いろはの内の「れ」から「な」までの五つ分が欠落している。ただし従来これに類する資料の存在は報告されておらず、そのため「いろはかるた」の研究でこれまで取り上げられたことはなさそう¹⁾だ。そこで取りあえず新出資料として紹介したい。今後、題簽付きの完本が発見されれば、正式書名も判明するはずである。「いろはかるた」の研究には、こういった周辺の資料に目を向けることも重要であろう。

二、書誌

最初に簡単に書誌を示しておきたい。書名・成立などは一切不詳。表紙も改装。表紙にあたる部分には、江戸・仙鶴堂小林喜右衛門の刊記部分が付けられているが、それは改装の際に付けられたものようである。同様に裏表紙返しを見ると、浪花・錦車堂の刊記が付いている。これが原装であれば、大坂・錦車堂の出版ということになるが、ほとんど知られていない無名の書肆なので、それ以上のことはわからない。

寸法はタテ十六・一センチ×ヨコ十一・三センチの中本。丁数はやや複雑で、中に半丁のみのものが二紙含まれている。のどの部分に丁付があり、最終丁を見ると「十七」とあるので、本来は十七丁だったのであろう。最初の丁は半丁のみで、丁付けは見当たらない。そこで二丁目を見ると「三」とあった。そうすると最初の半丁は「二」になるので、冒頭の「一」も落丁している可能性が高い。なお最初の半丁の「い」は、絵が次の丁とつながっているもので、本来は二丁裏だったのであろう（二丁半が落丁ということになる）。

まためくっていくと、「七」の次が半丁になっており、その後が「十」になっているので、そこに二丁半（八丁表裏・九丁表）分の落丁が存することになりそう²⁾だ。これをいろはに置き換えると、「れ・そ・つ・ね・な」の五字分が欠落していることになる。絵は見開き一面になっており、そこに三字配分が原則なので、計算上は一丁半分の落丁で整合していると思われる。ただし「れ」は頭字こそないもので、どどいつは七丁裏に記されているので、ことわざの欠落は四つとなる。

なお九丁目の半丁は次の丁に続いているので、本来は九丁裏だったのであろう。

三、内容

本書の内容は、いろは仕立てのどどいつで、そこに「いろはかるた」のことわざが用いられており、またそのことわざにふさわしい挿絵が加えられている。具体的に「い」をあげると、

一寸そのさきややみよとあればのめやおどれやきはうきよ

となつてゐる。頭に「一寸先は闇（夜）」ということわざが置かれており、それをうまくどどいつ風に仕立てる趣向となつてゐるようである。そこで仮題として『いろはたとへどどいつ』としてみた。

なおここに用いられてゐることわざは、原則として「京いろは」に近いようである。ただし「と」は「豆腐にかすがひ」ではなく「唐人の寝言」（上方いろは）、「た」は「立板に水」ではなく「短気は損気」（上方いろは）、「く」は「臭いものに蠅がたかる」ではなく「果報は寝て待て」（上方いろは）、「け」は「下駄と焼き味噌」ではなく「芸は身を助く」（江戸いろは）、「え」は「縁と月日」ではなく「縁につれば唐の物」（上方いろは）、「さ」は「竿の先に鈴」ではなく「猿も木から落ちる」（上方いろは）になつてゐるので、純粹な京いろはではなく、江戸いろはや上方いろはなどが一部混入した混態であることがわかる（やや成立が下るか）。なお「ひ」だけはことわざではなく、

ひやうばんくとうざいとざいあたりよしこのカツチく

となつてゐる。これによれば「どどいつ」というよりも「よしこの節いろは」の方が題名としてふさわしいかもしれない。

四、資料的価値

これまで百人一首をどどいつ風に仕立てたパロディの存在は既に知られてゐた。またいろは短歌のどどいつも知られてゐたが、「いろはたとへかるた」をどどいつ風に仕立てたものは未だ報告されていないようである。高橋愛次氏『伊呂波歌考』（三省堂）を見ると、「開化教訓いろは都々逸」が掲載されているが、内容は「一日に一字なるふて一年たてば」のようになつており、必ずしも諺仕立てにはなつてい

ない。その意味でも、本書は「いろはたとへ」の広がりを示す新出資料ということになりそうだ。

この「いろはどどいつ」に近いものとしては、かつて紹介した「たとえづくしいろは歌當和訓」があげられる。こちらは「い」が、

石の上三年なんであられふぞ 一日いてもちがおこるぞや

と狂歌仕立てになっているものであるが、やはり冒頭部分にことわざを置いている点は一致している。

この「たとえづくしいろは歌當和訓」の成立は天保頃とされているので、「いろはたとへどどいつ（仮題）」もほぼ同時代の成立と考えていいのではないだろうか。なおこの本の面白さは、ことわざのみならず挿絵も存していることである。「いろはかるた」と比較すると、大半は類似していることがわかる。既にある程度パターン化しているのである。ただし本書の方がより詳細な絵になっている。

今後こういったものに注目が集り、本書の正式書名が明らかになることはもちろん、さらに新しい資料が発掘されることを期待したい。それでこそ「いろはかるた」の研究も一層進展することになる。

〔注〕

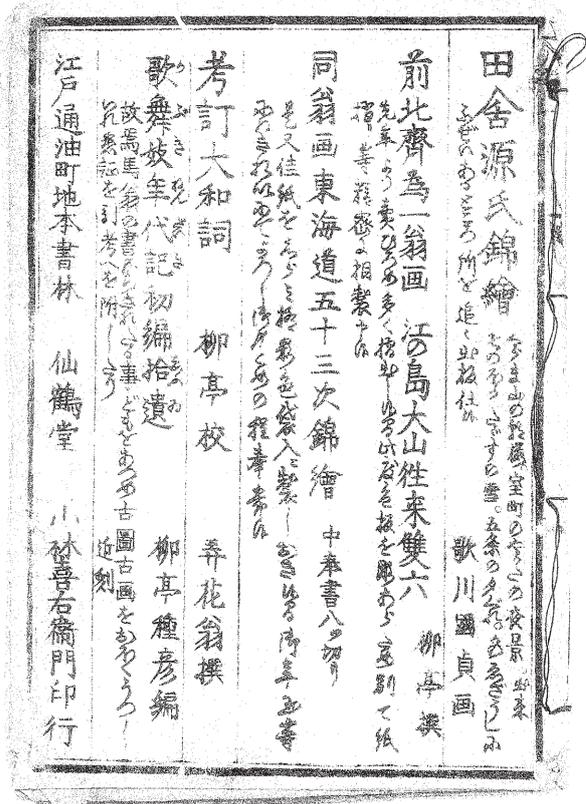
(1) 吉海直人『いろはかるたの世界』（新典社選書）平成22年4月でも触れていない。

(2) 吉海直人「新出「いろは譬尽」「たとえづくしいろは歌當和訓」の解題と翻刻」同志社女子大学学術研究年報58・平成19年12月

翻刻「いろはたとへどどいつ」

い 一寸いっすんそのさきややみよとあればのめやおどれやきはうきよ
ろ ろんごよまんせしかくななかいろにかへよとあるものを
は はりのあなから天さへのぞくぬしをのぞくになせ見へぬ
に にかいからさしたる目くすりじやないがとどかぬこひゆへめのやまひ
ほ ほとけのお顔かほもさんとやらよぬしのむしんはいくたびか

へ へたなおだんぎきくよなぬけんえんあるこひゆへどしがたし
と とうじんのねごととおまのりくつとんとわからぬことばかり
ち ぢごくぐらくみなかねしだいわたしやおまへのかぜしだい
り りんげんあせのごとしじや一度ひつたでたることばほうぐになりやせまい
ぬ ぬかにくぎのやうなきかないぬしにくさりついたりゑんのつな
る るいにあつまるそのともだちで人のころはしれやす
を をにも十八十九はやくよいまだおとこの二十はたちらず
わ わらふかどにはふくきたるならわられたわたしにやとくがある
か かへるおとこのつらみづくさいわしはへびになりのでやろ
よ ようめとうめとかさのうちや見よいよにすることたたれもよい
た たんきおこすはそんきのもとだ打破たばかりすみはせぬ
れ れんぎではらはきれないはづよわしはりんきでぬしやきれる
そ 欠
つ 欠
ね 欠
な 欠
ら らいねんのことならわらふおにやおろかあすふく風をもしればせぬ
む むまのみみかぜきこへぬ人にやわしもうちはでかぜを見よ
う うぢよりそだちのたとへのとをり唐とうの孟母もうぼのわけをしれ
ぬ ぬわしのあたまもしんくからやうわたしのあたまはのほせからやう
の のみといふたらつちとぞおもへものといふたら酒のかん
お おふた子のおしへにあさせをわたるあふた男おとこにやふかせがは
く くわほうはねてまつたとへもあれば主ぬとふたりでねてまとか
や やみにてつぼうでねらひがしれぬかたいおきやくはいしびやだ
ま まかぬたねならばへないはづよぬしにまかれてはへかぬる
け 芸げは身をたすくるふしあわせでもたのしや四つだけふたりつれ
ふ ぶしはくはねどたかやうじでもわしはおまへのつま用事ようじ
こ 是にこりよどうさいばうずわしはうかされちよさいほ
え えんにつるればとふのものたとへえんにつながらやとふがよい
て てらからさとへのおれいほきぎだわしはたらされさとがへり
あ あしもとからとりたつやうにわしにや定めた人がある
さ さるがうはきでおちたはきまわしはぎりゆへおとされた
き きりにふんどしかくなるうへはぎりゆへおとされた



[図版1] 改装仮表紙

ゆうれいのはまかせややなぎのもとよゆふべのはまたちや川のはた
 めくらののぞきはこころで見へる目あきでのぞきはかたふたぎ
 みみはみでとをすたとへもあればよは身につけこむかぜのかみ
 しわいお方のかきのたねやせうちこわいおかたでしやくのたね
 えん下にてまひならましよえんのないのでまいついた
 ひやうばんくとうざいとざいあたりよしこのカツチく
 もちはもちやなら酒やはさかやかのやきもちやこまりもの
 せ聖はみちすぐかしこいものよへびはじやみちしれるもの
 すずめ百までわすれぬおどりふして百までおどりたい
 京のいなかにやしのぶうるをんなこよひよなかにやしのぶはづ

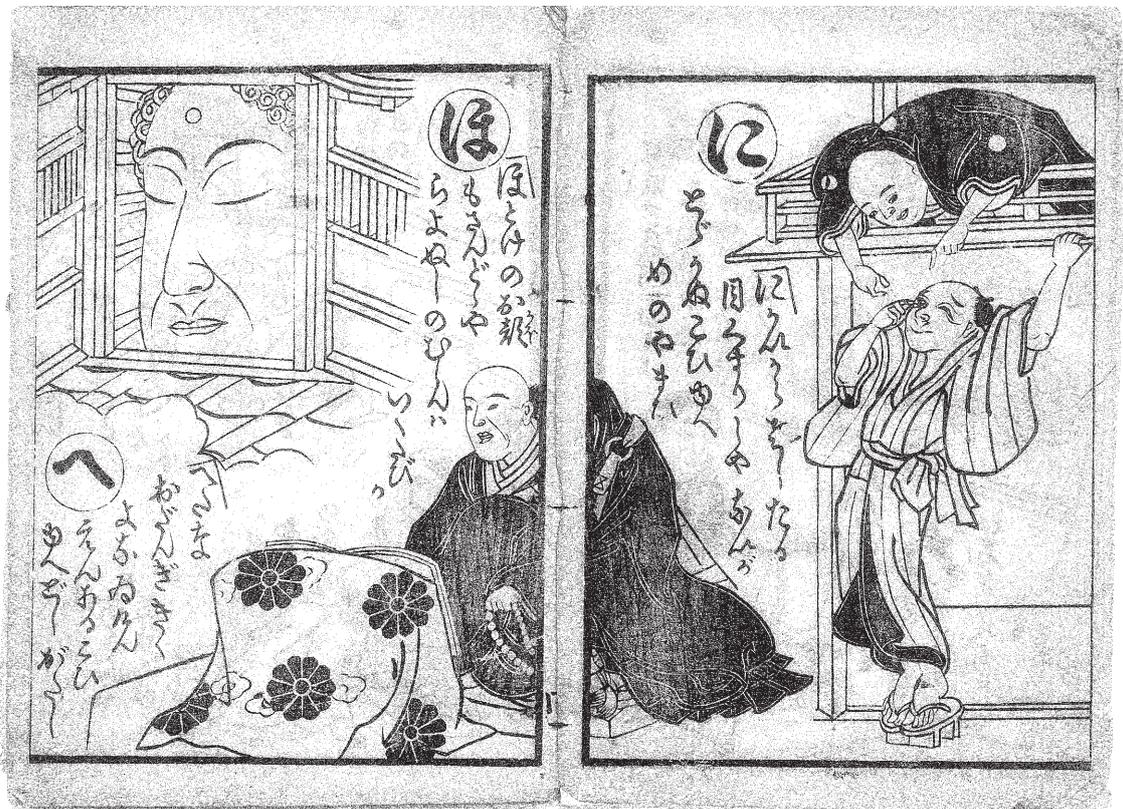
*本稿は二〇一五年度同志社女子大学研究助成金（個人研究）の成果の一部である。



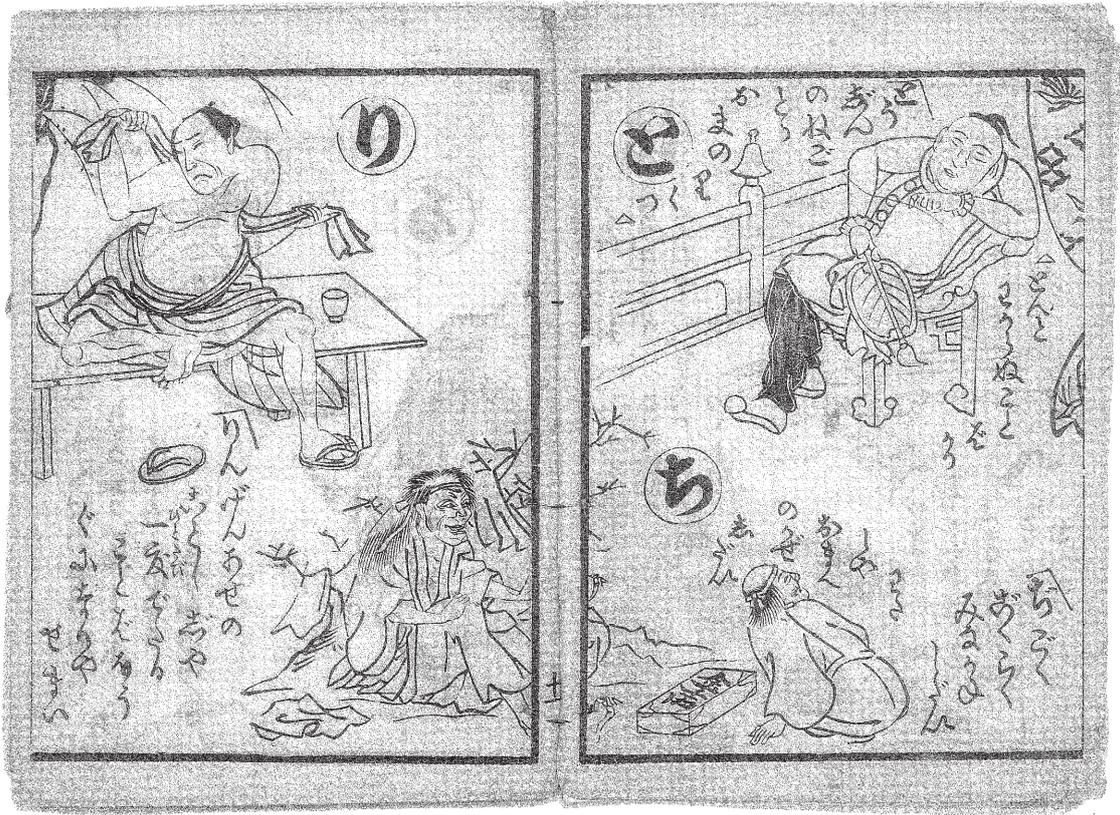
[図版2] 「い」（本来は二丁裏か）



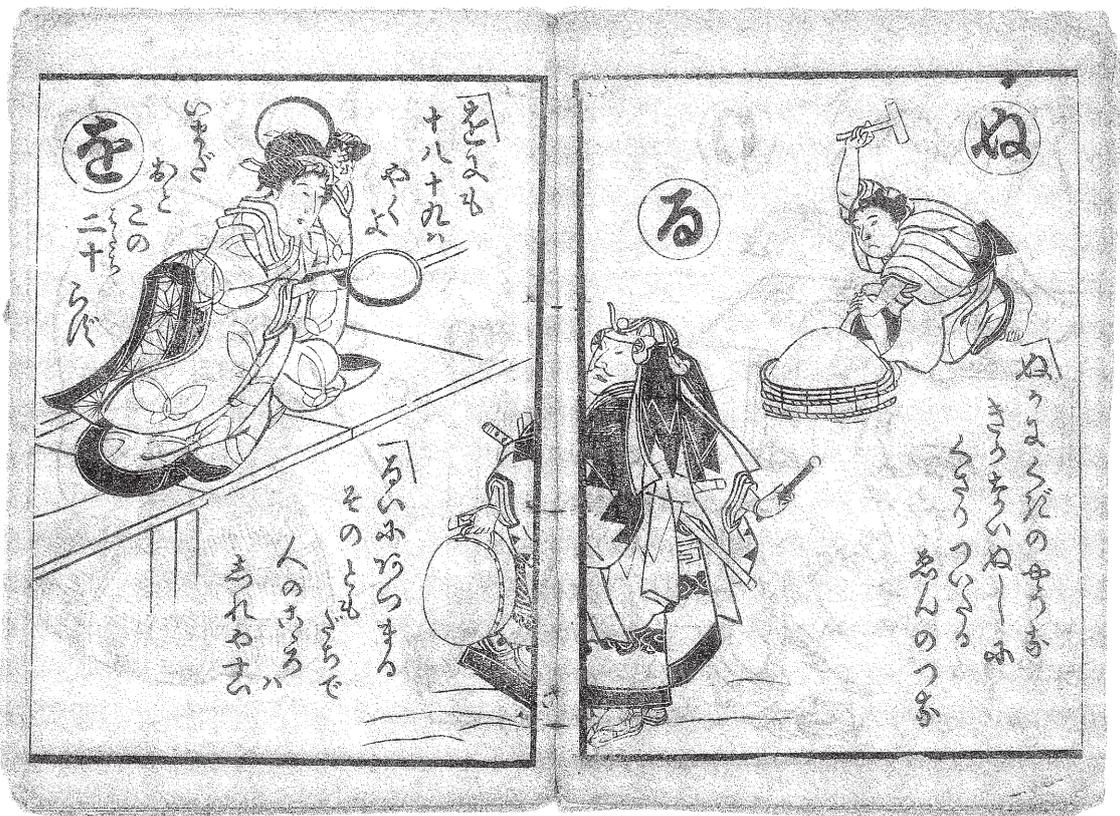
〔図版3〕 「ろ」「は」(三丁表)



〔図版4〕 「に」(三丁裏)・「ほ」「へ」(四丁表)



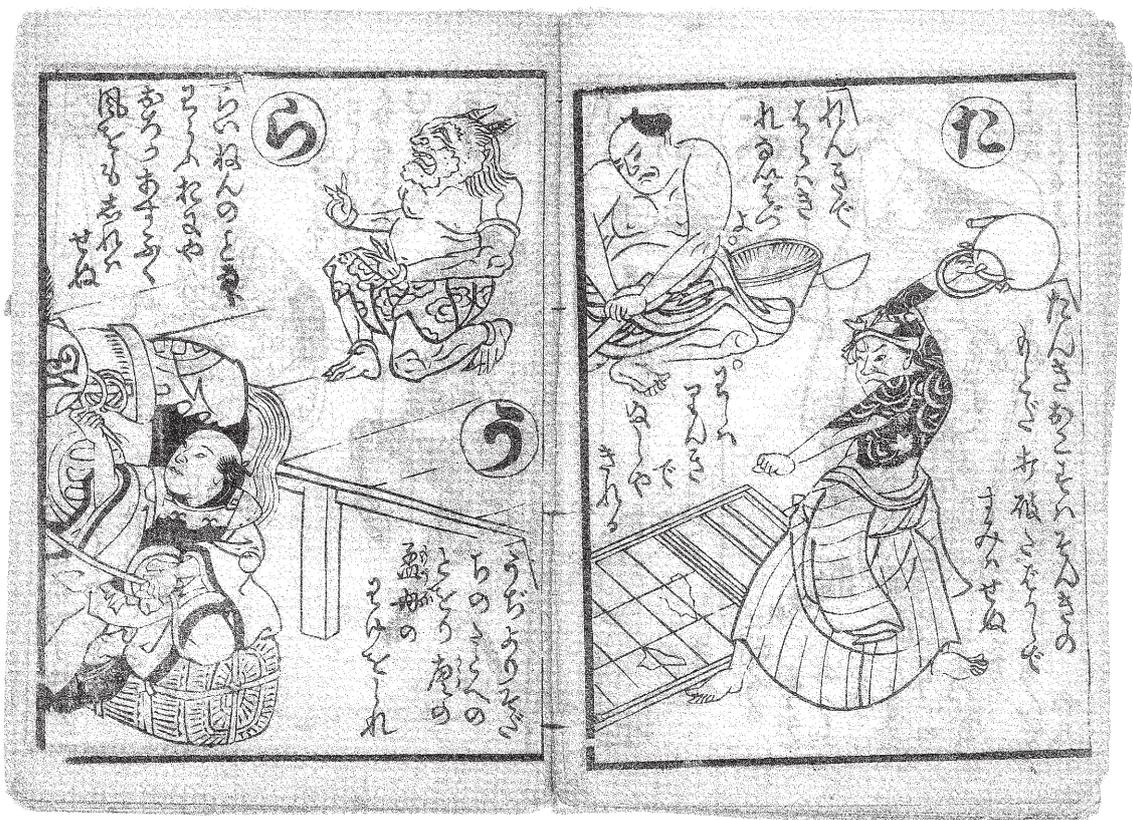
〔図版5〕 「と」「ち」（四丁裏）・「り」（五丁表）



〔図版6〕 「ぬ」「る」（五丁裏）・「を」（六丁表）



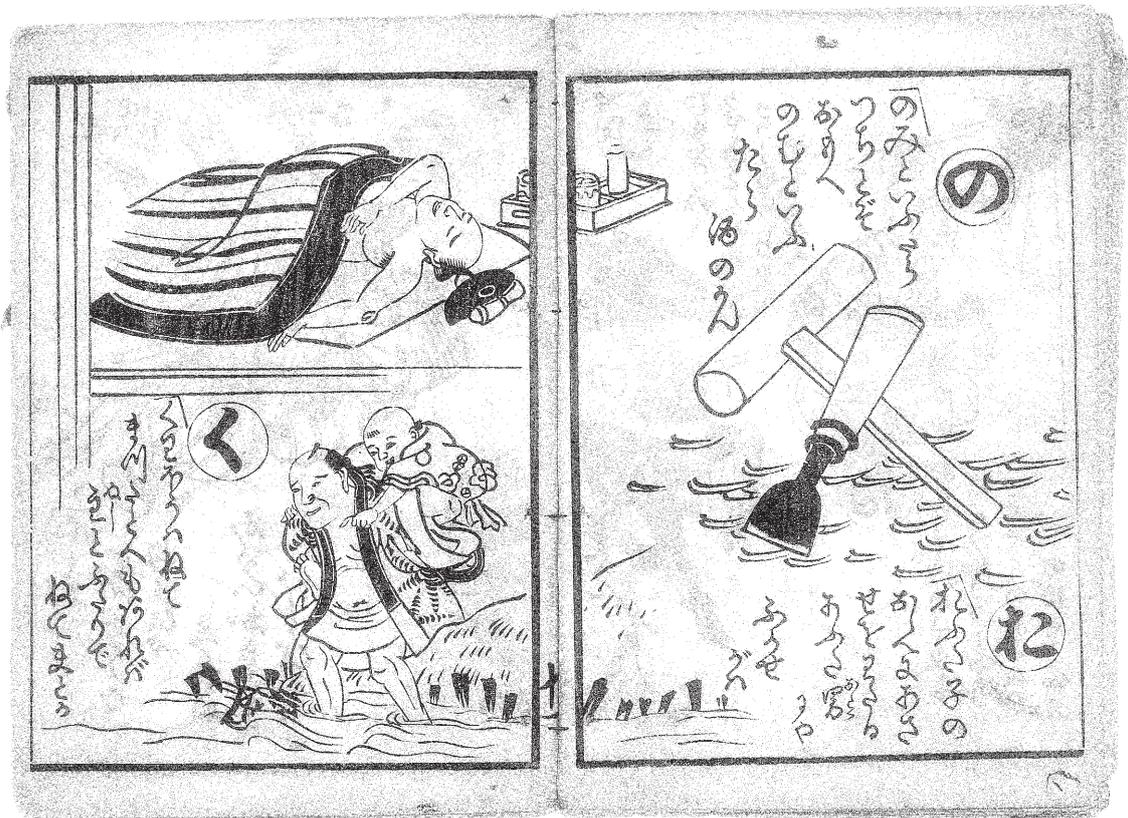
【図版7】 「わ」「か」(六丁裏)・「よ」(七丁表)



【図版8】 「た」「れ」(七丁裏)・「ら」「う」(九丁裏)



〔図版9〕 「む」「お」（十丁表）



〔図版10〕 「の」「お」（十丁裏）・「く」（十一丁表）



【図版11】 「や」(十一丁裏)・「け」「ま」(十二丁表)



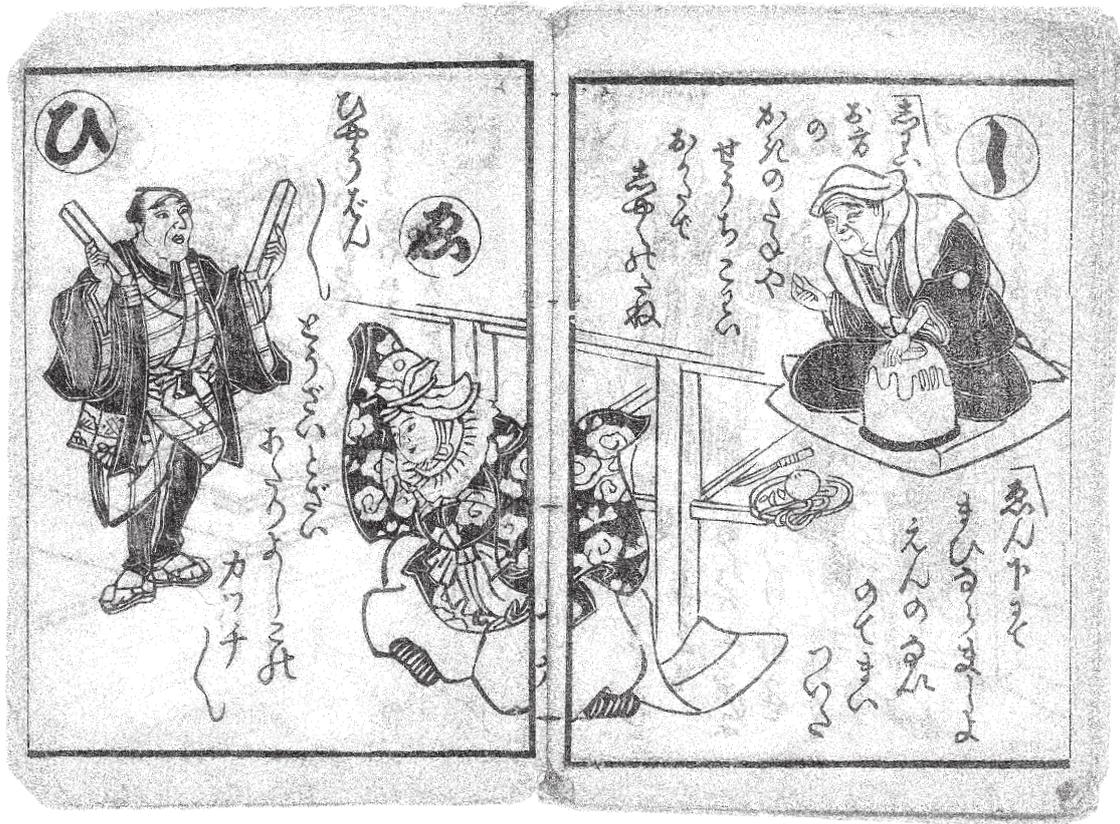
【図版12】 「ふ」「こ」(十二丁裏)・「え」「て」(十三丁表)



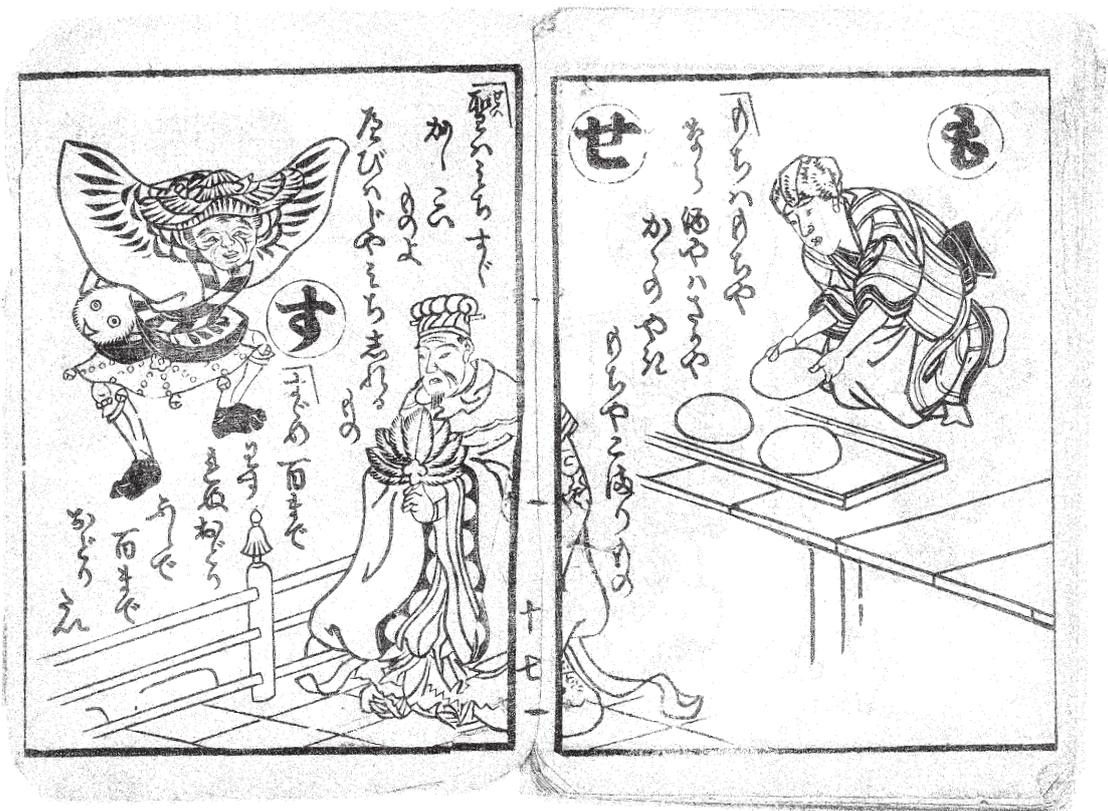
【図版13】 「あ」（十三丁裏）・「さ」「き」（十四丁表）



【図版14】 「ゆ」（十四丁裏）・「め」「み」（十五丁表）



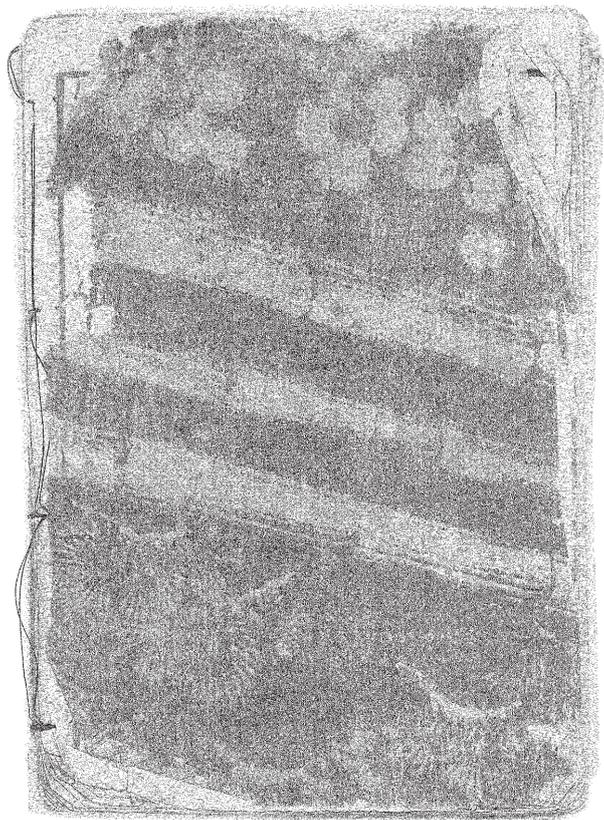
【図版15】 「し」(十五丁裏)・「あ」「ひ」(十六丁表)



【図版16】 「も」「せ」(十六丁裏)・「す」(十七丁表)



[図版17] 「京」(十七丁裏)・裏表紙見返し(錦車堂刊記)



[図版18] 裏表紙